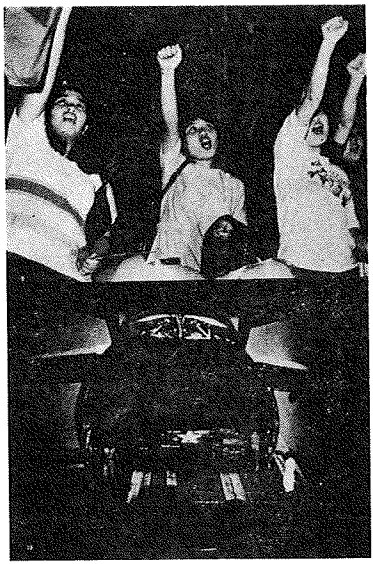


第16号

1971.2

書評

編集・発行
関西大学生活協同組合
組織部
「書評」編集委員会
編集人　髙尾　進

吹田市千里山17
TEL 388--1121
内線　776

書籍購入グループを創設し
一括共同購入を推進しよう
書籍の生協一元化をかちとろう

4　ロシアの革命運動と革命思意関係から
松岡　保

7　ロシア革命運動思想関係図書一覧

17　講演速記録
唯物史観と経済学
佐藤　金三郎

13　宇野経済学の歴史的意義と限界
林　一

11　古代史の謎に挑む　V
豪壮な長持形石棺の発掘
網干善教

2　巻頭言
＜反近代＞が透視するもの

23　編集後記

カット写真は中西浩＜静かなアメリカ人とおとなしい日本人＞（カメラ毎日2月号から）

【A】今日、世紀転形期の黙示録的な暗澹な陰影を濃くしている。学園闘争で、近代合理主義＝生産力理論の絶対的価値の根拠が熾烈に剝とられ、拮抗するかのようにこの陰下で埋葬されていた反近代、反合理、農本主義が登場してきている。

大江健三郎は『私の七〇年』で、〈終末観〉〈倭冠〉〈反・言葉〉〈脱亜〉〈自食〉〈不寛容〉〈幼児〉〈動物機械〉〈棄民・棄国〉現実＝暗澹な悪夢と、これへの反措置として〈沖縄〉＝日本の喪失した世界を提示した。石牟礼道子は、非合理な存在としての人間が生きねばならぬ基底の生の姿、ドロドロした怨念の形相の世界を〈水俣〉として提示した。

彼の沖縄、彼女の水俣と場の提起は、下意識へ辿る道程といえる。

わたしたちはいかなる〈世界〉と向き合い、方位・場を確定したのか。

【B】近代社会の矛盾＝精神労働と肉体労働との労働の分裂＝の廃絶、止場、統一への主体行動の世界である。換言すれば、存在それ自体が現出し、それ自体の解放が暴力の不可避的招来の世界へと向う地平である。

労働の分裂は、(a)生産力を前提とした大幅賃上げ、反合闘争としての労働運動の典型は六〇年三池闘争での、労働運動の巨大な壁の存在として確認した。(b)学園闘争で、自己否定として表現された。知＝科学の専門化、分業化が必然的に抑圧組織構造へ転化してしまう知の犯罪性の現実の姿であった。―として経験した。

戦後民主主義での、「資本主義下でのという歴史的条件つきの現実」への関わりの科学者、技術者の知の専門の立場を、「生産力」にまどわされた「社会主義」社会における科学者、技術者の身分、権利保障の優遇を対比する「進歩」の虚妄性を剝とられた。

そこで近代科学の曙の号砲、ダイナマイトを科学者・技術者の専門者へ「所有」され抑圧物へ転化したこの矛盾した連鎖をいかに爆破し切れるのか。「生産力理論」を否定しえるであろうか。

労働者の群の中へ翻転が提示された。外的関係を切断した自己止揚へ昇華、純化された。

【C】「生産力」が社会発展の原動力とする理論は、ブハーリンの「マルクス主義」にその原型をみることができる。そして、日本の知識人の伝統の呪縛と化している客観主義的な宿命論の傾向にみることができる。

「生産力理論」は、造物主の不能神「生産力」の量の変動によって資本主義の生成、発展、破局、没落の全過程

〈反近代〉が透視するもの

巻頭言

の運動がある、というのである。生産力の発展＝労賃の騰貴の潜在化＝利潤率の低下と、生産関係と生産力の均衡が破れることによって社会体制が動揺、崩壊し、再び新たな次元での均衡が回復し、新たな社会体制が生まれる、即ち社会の発展＝生産力の発展という物質へ還元する唯物論、客観主義である。だから、資本と賃労働の搾取関係は、労働力商品化の質的、内的な矛盾＝労働の分裂の現出ではなく、等価交換法則＝価値法則に立脚して資本蓄積する均衡法則＝生産力の合理性に化している。そこから、資本主義を非合理性としてとらえる。

ブハーリン、カウツキーは、帝国主義を、生産力の膨張、拡張として規定する。ブハーリン：独占利潤獲得のために金融資本により行なわれる領土拡張と関税の二政策。カウツキー：超過利潤の獲得を志向して実行する拡張政策。

このように物質運動に集約し、歴史における人間主体の能動性を没却・抹殺し完全な客観主義への転落の〝標本〟をみる。

しかし、反革命の根拠地、新植民地主義の日本で、資本主義のもとでの労働は人間性を抹殺するとする歴史発展段階論、日本資本主義を「特殊」封建的非合理な社会体制として資本の合理性＝均衡法則から憎悪する生産力理論、近代主義の土壌を肥沃にしてしまっているのではないだろうか。

【D】 歴史と社会とは、生産力の発展としてではなくまさに行動する人間の問題として、行動の広さ、高さの領域の造出としてある。

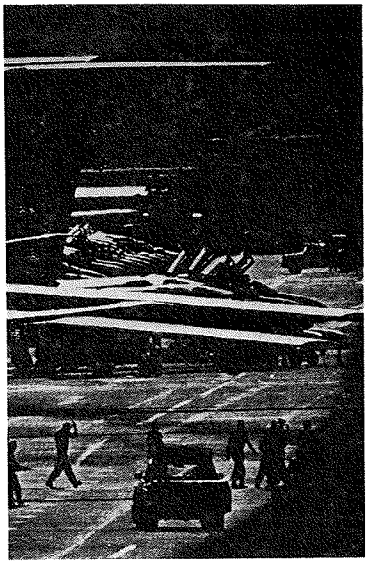
資本主義の高度生産力は資本主義の生産力の発展の結果ではなく、逆に矛盾の現出であり、国家独占資本主義＝帝国主義としての支配機構をつくりだした。豊かさの擬制の上に打立てられた生産力＝帝国主義の解体への現実化の陣痛の苦呻、早産をみた。

生産力理論＝物質主義は、価値の実体を物と物との交流関係のうちに求める人間関係（人間生活）ぬきの唯物論客観主義である。これを基柱とした運動形態は、〈世界〉を構築し切れないことを現実化した。

幻想を拒否した人間関係における稀薄性、未来が不信、恐怖の現代の拡散的なものをいかに凝集的に現実化しえるのか。人間関係は組織体を媒介とした運動形態として。

「一度目は悲劇として、二度目は茶番として」と、人間関係のアイロニーを味わうより悲惨を演じていた。もう反生命的、反人間的な劇を演ずるのは終った。

ロシアの革命運動と革命思想関係から



松岡　保
（経済学部　助教授）

ロシア革命とこれにかかわる運動、思想関係の刊行物は、近年、かなり数多く出されただけでなく、その種類、傾向も増加してきた。数の方は、一九六七年がロシア革命五十年に当ったことから当然としても、その種類、傾向が多様化してきたのは、やはり日本の思想的環境の変化を反映していると、いえそうである。すなわち、最近は、ソ連共産党に代表されてきた「正統」的立場とはことなった視角からのロシア革命論や、非正統的な運動、人物、思想の研究や紹介が随分と目につくし、それらがかなり関心をひいているようである。なかには、果してそれほどとりあげるに値いするか否かに疑問をもつ人もある。また、それらのおのおのが、なんらかの形で、著者、訳者の思想的立場や関心と結びついていること、未だどの立場を決定的に正しいとなしがたい状況になることも、自明である。

けれども、ともかく最近まで無視、黙殺されてきた運動、人物、思想にも光があてられてきたり、当然紹介されるべき著作が翻訳されてきたことによって、今後、ロシアにおける革命運動や革命思想を考えるに当って、より広い幅と深い奥行きが要請されるようになったことも、事実である。幸か不幸か、「党史」と「レーニン全（選）集」だけでロシアの革命運動を論じ、評価できた時代は終ったし、終るべきであった。それゆえ、なお、好悪、水準さまざまなことを承知しつつ、ロシア革命に関連する数多くの刊行物から、どちらかといえば非正統的ではあるがやはり見逃せないように思われるものをいくつかを拾いだしてみよう。本誌の性質上、入手の容易なものにかぎったし、雑誌論文は省略した。

〈一〉

まず、ロシア革命をあつかったものの代表は、①松田道雄「ロシアの革命」と③江口朴郎編「ロシア革命の研究」であ

る。①は、ゲルツェン、オガリョフの一八二八年の「誓い」（革命への希望）からはじまって一九四〇年のトロツキーの暗殺（革命への幻滅）までを扱ったもの。全篇にわたって、著者の精神史と重なった、さりげないけれども痛烈な指摘が胸を打つ。とくに、ロシアの革命思想の展開過程をあつかった前半の面白さは、出色である。事実誤認、参考文献の適否を指摘する声もあるけれども、やはり、入門書、通史という点でも、「ロシア革命」を全体的に見直すという点でも、現在最適であるといいたい。おなじ著者の②「革命と市民的自由」とあわせよむとき、なお得るところは大の筈である。これに対し、③は、部厚い論文集故に、簡単に全篇通読とはいかず、とりつきにくいものもあろうが、倉持俊一「ロシア革命の原因論をめぐって」、広瀬建夫「一九〇五年革命におけるソヴェトの形成」あたり、あるいは中心的論文たる和田春樹「二月革命」、長尾久「二月革命から七月事件へ」、さらには和田あき子「ロシア革命における人間変革の思想」などは、一般的にも興味をひこうから、それらから各人、関心の深い部面のものに目を向けてゆけばよいのでないかと、思われる。その他のものも、読みごたえのある力作が多いし、革命そのものに関心ある人は、一度は手にとって頂きたい。

翻訳の方では、E・H・カーの大著、④「ボリシェヴィキ革命」が、第二巻まで出版されている。西ヨーロッパにおける研究として、すでに半ば、古典的な地位を占めている本書は、今後とも、すこし突っこんでロシア革命を論じるかぎりは避けて通ることはできないものであり、続刊が待たれる。同じ著者による論文集、⑤「ロシア革命の考察」が手頃な、しかし結構圧縮された書物とすると、同様の感をもたせるのが、いわゆる「近代化」論―その中では左派―の立場に立つフオン・ラウエの⑧「ロシア革命論」である。帝政時代の工業化政策の推進者で、日露戦争終結時の講和全権、第一次ロシア革命の収拾者となったヴィッテ研究をふまえたものだけに、「近代化」論の視点、その歴史と現在に対する認識を知る上にも興味ある好著といってよい。

なお、一九〇五年革命の発端となった「血の日曜日」事件とその指導者ガポン―ラスプーチンとならんでロシア革命史上、さまざまなとりざたをされてきた僧侶―を、民衆運動というものの展開の仕方という問題に目を向けながら把握し直そうとしている⑨和田春樹・あき子「血の日曜日」も、問題関心、資料利用の両面で、現在の研究方向を代表する。

＜二＞

さて、ロシア革命となると、当然、レーニン、トロツキーの革命論や生涯が問題となる。それぞれ、⑩「レーニン全集」、⑪「トロツキー選集」が基礎文献としてあり、ともに重要なことはいうまでもない。さまざまな「レーニン選集」は、その編集、刊行自体が一つの歴史的研究対象たりうるのであるが、レーニンは当初の限定どおり省略しよう。ただ、トロツキーの方では、ロシア革命との関連という視角からいえば、スターリンとの対立が中心となった「選集」第一期のものよりは、目下刊行中の第二期のものや「選集」以外のものの方が、より密接、直接的である。永続革命論は、なによりも⑫「一九〇五年革命―結果と展望」における展開が有名であるし、一七年革命にたいするかれの把握の代表的なものは、⑬「ロシア革命史」である。後者は、革命の当事者の立場からする記述であり、トロツキーを知る上にもロシア革命を考える上でも必読文献とされている。トロツキーのロシア革命論としては、この二著からはじめ、そこから「選集」（ことに第二期）のものに広げてゆくのが正道であろう。

もっとも、先に伝記的なものに目を通したいむきには、ドイッチャーの⑭「トロツキー」（三部作）からという方法もある。ドイッチャーには⑮「スターリン」その他の著作が多いが、なかでも⑭は、かれのもっとも精力をつぎこんだ名著であり、そのずばぬけた面白さは、人をひきこんではなさない。この点、レーニン伝は、数こそ多く、またたしかにそれぞれ特徴をもったものとして、⑯～⑲などをあげることができるけれども、ドイッチャーの「トロツキー」に匹敵するものはないといわねばならない。やはり⑰のクループスカヤ（レーニン夫人）のものが、いまなお、もっとも意味深く示唆的であるようにも思われる。

革命時のルポルタージュとしては、スハーノフ「ペテルブルク一九一七年」（抄訳）筑摩書房（世界ノン・フイクション全集9）が品切れとすると、まとまったものでは、依然として⑳ジョン・リード「世界をゆるがした十日間」ということになる。生き生きとした筆致で、長く生命を保ちつづける本書のほかでは、後にのべる革命期の体験者のもののなかに断片的にはいくつかあらわれる。（たとえば㊽㊾㊿）

＜三＞

ところで、ロシア革命にいたるまでのロシアの革命思想や運動についてとなると、既述の①のほか、(51)荒畑寒村「ロシ

ア革命運動の曙」、㉜「ロシア革命前史」が、まずあげられる。個々の事件、運動の解釈、ならびに全体の調子に、異をとなえたくなる点も多い――というのは、古めかしい感がする――けれども、日本の社会主義運動の先駆者たる荒畑氏における日本とロシアのつながりを感得させるものをもっている。公害問題からあらためて注目をあびてきた足尾銅山＝谷中村事件にも関係し、いらい社会主義運動を歩まれた氏の自伝、㉝「寒村自伝」をあわせよめば、一層その感は深まろう。デカブリスト、ナロードニキからロシア革命にいたる思想と運動を通読したいさいには、現在もっとも手にしやすいものである。

ナロードニキについて、ソヴエトで出たものの訳には、㉞レーヴィン「ロシア・ユートピア社会主義」、㉟ニカンドロフ、ガラクチェフ「ロシア・ナロードニキのイデオローグ」の二つがある。㉞はゲルツェンとチェルヌィシェフスキーを、㉟はラヴロフ、バクーニン、クロポトキン、トカチョフ、ミハイロフスキーをあつかっており、ともに、ソビエトにおけるナロードニキ論の代表的な例である。こうしたものがあらわれるようになったことも、そしてとくに、㉟においてクロポトキン、ミハイロフスキーを論じていることも、たしかに一つの変化をあらわすものである。もっとも、未だ公式的な色彩が濃いことは否めない。むしろゲルツェンなら㉖「過去と思索」の豊富な人間と社会の描写、㉗「向う岸から」の雄叫びと涙に直接に触れる方がより感じるところ大に相違ない。いずれも、訳が待たれた代表的な著作で、人を引きこむものがある。貴重な訳としてすすめたい。

近刊が中心とのことで、未だ訳の少いチェルヌイシェフスキー、ドブロリューボフといった思想家のものの訳は割愛し、ポピュラーな面をもつクラフチンスキーの㉘「地下ロシア」、㉙「ツァー権力下のロシア」が訳されたことを記しておこう。「土地と自由」派の革命家として有名な、クラフチンスキーが西欧に亡命中に、ロシアにおける革命運動について認識されることをねがって書き記したものであり、古くから読まれてきた古典的なものである。おなじく「土地と自由」派から「人民の意志」派で活躍し、シュリッセルブルクの要塞監獄で二十年余をすごした女性ヴェラ・フィグネルの「ロシアの夜」（世界ノン・フィクション全集21、筑摩書房）は今入手しにくいが、これとならんでひときは胸を打つ内容である。なお、ロシアの革命家の運命と切りはなせない有名なシベリア流刑の状態をたどったものに、㉚相田重夫「シベリア流刑史」があり、便利である。流刑と亡命、この二つを抜きにロシアの革命家については語れない。

＜四＞

ナロードニキ主義ともマルクス主義とも関連しているバクーニンや無政府主義関係のものが、最近何冊かでた。㉛「世界の名著42」は、バクーニン、クロポトキンのものをプルードンとともに収めているし、㉜「アナキズム叢書」Ⅰ、Ⅲも、バクーニンのものから成っている。天衣無縫なこの革命家は、マルクスやレーニンとはまたちがった愛好者をもつようであるが、事実、㉜Ⅲに訳されている「告白」などは、そうした人間的、伝記的興味をそそるところ大である。伝記といえば、バクーニンについては、E・H・カーの⑥「バクーニン」をあげねばならない。カーには、ゲルツェン、オガリョフを中心とした⑦「浪漫的亡命者」もあり、どちらも相当に辛辣、皮肉な目で描かれているから、かれの「マルクス」（未来社）同様、立腹する人も苦笑する人もあるだろうが、ともに大変面白いし有益なことも事実である。他のアナキズム関係のものは、㉝～㊲にならべておいたが、そのなかで、㉟クロポトキン「一革命家の思い出」は、古くから定説のある著作で、著者の暖かな人柄がよくあらわれているし、ナロードニキの運動を知る上にも欠かせない。同じ著者の㊲「麵麭の略取」が幸徳秋水訳であるように、クロポトキンはその後も大杉栄によって訳されており、日本の運動との関係は深い。

一八六一年の農奴解放や以後の社会・経済史、ならびに社会・経済思想史の面では、いずれも本格的で、それゆえにやや高度ではあるけれども、㊳～㊵の菊池昌典、日南田静真、田中真晴氏のものはおのおのその標題のしめす問題についての画期的な力作である。そして、最近の日本での研究として、相互に相通じる面をもち、学界での動向と水準をしめしている。この三者に較べると、すこし傾向もことなり、一層とりつきにくい感もしようが、㊶マサリック「ロシア思想史」はこの方での古典的著作で、スラヴ主義の問題を含めたロシアの哲学・宗教的問題に関心をもつかぎりは必須の文献であり、そのさいには、同時に㊷の勝田吉太郎氏のものも同様となる。ただ、後者は標題からすぐ想像される向きには戸迷わせる内容であり副題の方が内容に直接即したものであるから、その点だけは要注意である。

＜五＞

アナキズムとならんで刊行著しいものに、エス・エル（社会革命党）、テロリスト関係があり、たとえば㊸～㊺にみられるよう、エス・エル戦闘団の幹部としてテロ活動に従事したサビンコフのもの

が三種類――同じものの異訳を含めると五種類――でて、それぞれ訳者、解説者の受けとめ方をしめしているかと思うと、テロの指揮者で同時に警察のスパイという二重人格で有名な、そしてそれ故に異様な興味をそそらせるアゼフについても、㊺、㊼と二冊が訳された。㊺のボリス・ニコラエフスキーのは記録にもとづいてのもの、これに対し㊼のロマン・グーリのものは「小説」の形をとったものである。㊺の方を性格上まずすめたいが、正直いって訳が悪いのは惜しまれる。エス・エルをテロを通してだけ見ることは疑問であるのに、目下はそうした風潮が優勢な傾向のようであるのは、今まで無視、ないしは一蹴されてきたことへの反動であろうか。その意味では、エス・エル左派の女性闘士で一七年革命をも生きたマリア・スピリドノーヴァをえがいた㊽スタインベルク「左翼エス・エル戦闘史」の方が正道をゆき、重要ともいってよい。

スピリドノーヴァのものが一九〇五―三五年の期間、つまり一七年革命をはさんだ革命家の在り方―革命への献身と革命後の幻滅、反対派としての運命―の一つをしめしているとすると、立場、行動は異にしながら、相似た形でその間の生き方の証言をなしているのが、㊾セルジェと㊿バラバーノヴァの回想である。哀愁を帯びたその美しさ――とくに㊾――からなにを感じるかはともかく、革命前の証言（たとえば(52)(53)(54)）との差に、画期を認めるべきことはたしかである。

その一七年革命に付随し、圧殺された、クロンシュタット反乱やウクライナのマフノ運動をあつかったのは、アナキスト・ヴォーリンの(51)「一九一七年・裏切られた革命」、(52)「知られざる革命」であり、これらは、無視され、かくされてきた運動と思想を伝えようとするものとして、前出のものと同じような意味あいをもっている。単なる興味、好奇心に終るか否かは、今後の課題であろう。

以上と並べて特異なものといえば誤解されようが、(53)「道標」はたしかに注目すべき刊行物である。ベルジャーエフを除いて、いままでほとんど紹介されなかったロシア・ブルジョワ・インテリゲンツィアの思想をしめす有名な論文集で、ストルーヴェやブルガコフらが名を連ねている。同じシリーズ「ロシア群書」に予定されているものは、いずれも見逃せず、期待は大きい。これらに較べると――〈一〉に記すべきであったかもしれない――が十月革命時の臨時政府首相で先年まで生存していたケレンスキーの(54)「回顧録」は、部分的、資料的には重要な事実を含むとはいえ、全体としては弁明的で重みに欠けている。

さらにつづいて、革命後のソビエト経済・社会やコミンテルン、スターリン体制問題にかかわるものをあげるべきであろうし、また注目すべきものも多いけれども、それは別の機会にゆずりたい。そして、上記の書物の一覧表を左にかかげておく。

ロシア革命運動・思想関係図書一覧

① 松田道雄「ロシアの革命」河出書房
―（世界の歴史19）
② 松田道雄「革命と市民的自由」筑摩書房
③ 江口朴郎編「ロシアの革命の研究」中央公論社
④ E・H・カー「ボルシェヴィキ革命」I＝原田三郎、田中菊次、服部文男訳　みすず書房
⑤ E・H・カー「ロシア革命の考察」南塚信吾訳　みすず書房
⑥ E・H・カー「バクーニン」大沢正道訳　現代思潮社
⑦ E・H・カー「浪漫的亡命者」酒井只夫訳　筑摩書房
⑧ T・H・フォン・ラウエ「ロシア革命論」倉持俊一訳　紀伊国屋書店
⑨ 和田春樹・あき子「血の日曜日」中公新書
⑩ 「レーニン全集」全45巻　大月書店
⑪ 「トロツキー選集」第Ⅰ期、第Ⅱ期　現代思潮社　既刊二十冊
⑫ トロツキー「一九〇五年革命・結果と展望」対島忠行、櫛原彰治訳　現代思潮社
⑬ トロツキー「ロシア革命史」①～⑥　山西英一訳　角川文庫
⑭ ドイッチャー「武装せる予言者」ロツキー・一八七九～一九二一年」

「武力なき予言者トロツキー・一九二一～一九二九年」
「追放された予言者トロツキー・一九二九～一九四〇年」
田中西二郎、橋本福夫、山西英一訳　新潮社

⑮ ドイツチャー「スターリン」山西英一訳　みすず書房

⑯ ソ連共産党「レーニン伝」Ⅰ‖　内村有三訳　国民文庫

⑰ クルプスカヤ「レーニンの思い出」上下　内海周平訳　青木文庫

⑱ ルフェーブル「レーニン」大崎平八郎訳　ミネルヴァ書房

⑲ ルイス・フィッシャー「レーニン」上下　猪木・近藤訳　筑摩書房

⑳ ジョン・リード「世界をゆるがした十日間」原光男訳　岩波文庫

㉑ 荒畑寒村「ロシア革命運動の曙」岩波新書

㉒ 荒畑寒村「ロシア革命前史」筑摩書房

㉓ 荒畑寒村「寒村自伝」筑摩書房

㉔ レーヴィン「ロシア・ユートピア社会主義」石川郁男訳　未来社

㉕ ガラクチノフ、ニカンドロフ「ロシア・ナロードニキのイデオローグ」小西善次訳　現代思潮社

㉖ ゲルツェン「世界文学大系」金子幸彦訳　筑摩書房

㉗ ゲルツェン「向う岸から」　外川継男訳　現代思潮社

㉘ ステプニャーク‖クラフチンスキー「地下ロシア」佐野努訳　三一書房

㉙ クラフチンスキー「ツアー権力下のロシア」漆原隆子訳　現代思潮社

㉚ 相田重夫「シベリア流刑史」中公新書

㉛ 「ブルードン・バクーニン・クロポトキン」中央公論（世界の名著42）

㉜ アナキズム叢書「バクーニン」Ⅰ‖　三一書房

㉝ 大沢正道「アナキズム思想史」　現代思潮社

㉞ G・ウドコック「アナキズム」Ⅰ‖　白井厚訳　紀伊国屋書店

㉟ ダニエル・ゲラン「現代のアナキズム」江口幹訳　三一新書

㊱ クロポトキン「一革命家の思い出」藤本良造訳　角川文庫

㊲ 「麺麭の略取」幸徳秋水訳　岩波文庫

㊳ 菊地昌典「ロシア農奴解放の研究」御茶の水書房

㊴ 日南田静真「ロシア農政史研究」御茶の水書房

㊵ 田中真晴「ロシア経済思想史の研究」ミネルヴァ書房

㊶ T・G・マサリック「ロシア思想史」上下　佐々木俊次、行田良雄訳　みすず書房

㊷ 勝田吉太郎「近代ロシア政治思想史―西欧主義とスラヴ主義―」　創文社

㊸ サヴインコフ「テロリスト群像―ナロードニキ」川崎渓訳　現代思潮社

㊹ ロープシン「蒼ざめた馬」　工藤正広訳　晶文選書

㊺ 同・川崎渓訳　現代思潮社
ロープシン「漆黒の馬」工藤正広訳　晶文選書同・川崎渓訳　現代思潮社

㊻ ボリス・ニコライエフスキー「革命のユダ・アゼーフ」荒畑寒村訳　現代思潮社

㊼ ロマン・グーリ「アゼーフ」神崎昇訳　河出書房

㊽ スタインベルグ「左翼エス・エル戦闘史」蒼野、久坂訳　鹿砦社

㊾ V・セルジェ「一革命家の回想」浜田泰三訳　現代思潮社

㊿ アンジェリカ・バラバーノフ「わが反逆の生涯」久保英雄訳　風媒社

(51) ヴォーリン「一九一七年・裏切られた革命」野田茂徳、干香子訳　林書店

(52) ヴォーリン「知られざる革命―クロンシュタット反乱とマノフ運動―」野田茂樹、干香子訳　現代思潮社

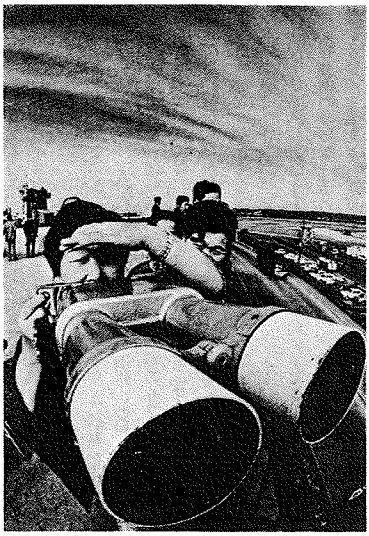
(53) 「道標」小西善次訳　現代思潮社（ロシア群書）

(54) ケレンスキー「ケレンスキー回顧録」倉田、宮川訳　恒文社

公害調査からの告発

——水島コンビナートの実態から

■建築学科都市計画研究室　水島調査班



沢井良政

（工学部公害を粉砕する会）

現在、日本帝国主義の飛躍的な成長は、一方では国内における企業の合理化、近代化、そして再編、搾取体制の強化等の下部構造の整備、強化、（具体的には、旧全国総合開発計画から新全国総合開発計画の移行に示される）、さらに、法律体制の整備、戦闘的労働運動、学生運動の積極的弾圧等によって保証され、今やその矛盾は、国内の労働者だけでなく、それを含み、農漁民、貧困階層、プチブル、アジア人民においてあらゆる面におしよせている。それが一つには公害という型で典型的に表現される。公害は、公害基本法等というブルジョア法やあるいは、補償金、都市計画等によっては決っして解決されず、賃労働—資本における生産関係の矛盾の所産であるゆえに、ブルジョア的生産関係の止揚なくしてその問題は解決されないということを、まず確認してほしい。

我々建築学科都市計画研究室水島調査班は、昨年十一月二十六日から十二月六日まで、水島コンビナート建設によって自然破壊と人間破壊が最も象徴的に表われている地区—呼松地区、松注地区—の住民及び住生活環境の調査を行なった。我々は戦後日本資本主義の急激な工業化農村漁村の地における資本のなしくずし的設備投資等によって、倉敷市水島地区の住民がどのような型でその生活が破壊され、地域社会におけるコミュニティーがどのような型に変化し、農漁村が資本によって食い荒らされていくその実態を明らかにし、さらに、水島の環境変化が

住民自体を変えていくことは確実なのだが、そこから発生する反公害、反コンビナートを軸とした地域闘争（既成組織のではなく、コンビナート関係労働者及び各地区住民下部からの闘争）を発見し、連帯するという、当面の目的意識でもってのぞんだ。

調査方法は、アンケート（約八〇〇枚、一世帯につき一枚）と、住民と直接生活上の問題について話をするという二つの方法を同時的に行なった。調査の結果とその分析は、後ほどくわしく報告するつもりです。

さて、水島工業地帯の概略を述べたいと思います。

水島臨海工業地帯は、岡山県の三大河川の一つの高梁川の川口にできた三角州と、沿岸の遠浅海面を埋め立てた造成地に開発された日本屈指の大規模な工業地帯でこの地は、その昔、源平水島合戦のあったところであり、工業開発が行なわれるまでは、漁業と干拓地農業で成り立っている内海沿いの一村に過ぎなかった。戦後、ブルジョアジーのまきかえしとともに、日本重工業が再開し水島は自動車工業に初まり、これを契機として食用油精製工場、石油精製工場、コンクリート製品工場、製鉄工場、石油関連化学工場等が種々と誘致されて、一九六〇年頃から操業を開始したた。岡山県は工場誘致とともに港湾の整備、新らしい工場用地の造成に努め、工業用水は高梁川を総合開発することによって確保され、電力は中国電力の水島進出によって、現在、二八万一千KWの能力で稼動しているが、将来の需要に対しても十分増設に応じられる状況にある。この地帯の工業用地総面積は、四二、六五二六〇〇㎡（堺コンビナートは二六、〇〇〇、〇〇〇㎡）で立地企業七四社八三事業所のうち、主なものは三菱重工業、三菱石油、日本鉱業、三菱化成グループ、旭化成、川崎製鉄、東京製鉄、中国発電、三菱商事グループ等である。そしてこれらの工場による水島地区の六三年から六八年に至る五年間の工業生産額の伸びは、七〇一億円から二八五四億円と約四・一倍に達している。しかも現在では四割しか操業されていず、あと六割の工場群が一九七五年までに押しよせてくるのである。このような独占企業の進出は水島ばかりではない。玉島、児島すなわち岡山県南部沿岸地帯、福山市沿岸、坂出、丸亀すなわち讃岐平野沿岸と、瀬戸内海沿岸くまなく、工場と集合煙突が立ちならび、瀬戸内海国立公園つまり瀬戸内海石油化学コンビナート地帯が新らたに出現するのである。従って瀬戸内海は死の海と化し、一切の農村漁村は分解し、その上公害の一大スーパーマーケットを創出する。公害に関していうと現在、水島地域では公害いわゆる大気汚染（バイ煙、亜硫酸ガス）、悪臭、水質汚濁、騒音、地盤沈下、ガスタンクの爆発等の現象がすでに明らかになっているが、我々の見聞した自然破壊、人間破壊状況を少し具体的に述べてみよう。（呼松、松江地区のみ）

① ぶどう、マスカット、いちぢく、梅がならない。みかんの品質が急激に落ちコンビナートに面した南西斜面はまったく商品にならない。

② イ草の先枯れ、松の立ち枯れが顕著に見られ、良質を誇っていたたたみ表用のイ草を全農家が生産中止に追い込まれた。

③ さといもの葉に油が浮く。

④ 魚はねこでも食わない。

⑤ 老人と幼児に圧倒的にぜんそく持ちが多い。頭痛、かぜひきがなかなかなおらない。

⑥ コンビナート関係の危険作業（例えば、集合煙突の掃除、海に捨てた重油をふくむ排液の回収）はほとんど元農漁民の手によってやられており、作業中の労務災害がひんぱんにあり、その責任は一切中小下請企業か各労働者個人におしつけられている。

⑦ 一九六七年、三菱合成化学のガスタンクが夕方大音響と共に爆発し、水島の住民を不安の中に落としいれた。（呼松地区においては全世帯に避難命令がでた。）

⑧ 各工場内で時折、小爆発があるらしいが、水島消防署は立ち入ることが出来ず、工場内の消火器具で延焼爆発をくいとめているらしい。

以上の一切の事項が一九六二年前後から顕在化しているし、バイ煙、亜硫酸ガス等によって人間の生命が自然物の存在が危険にさらされているのは整然とした事実なのだ。

ところで戦後日本資本主義経済は、一九四七年以降財政インフレをテコとして、傾斜生産方式を採用し、重点産業に国家資金や資材を撒布することにより、一応の生産の回復と資本の蓄積をなしえた。さらに傾斜生産方式から多数の産業部門において、その部門ごとに独占体に集中して生産を行う集中生産方式への移行とも結合して、資本の系列化に拍車をかけ強固な資本の支配と資本の蓄積をはかりつつエネルギー源の転換（石炭から石油）をめざしていた。そして一九五五年前後にその原料基盤＝エネルギー源の転換が始まった。それは石油を原料とすることによって新たなプラスチック（ポリエチレン系）や合成繊維（テトロン等）の生産が可能になるばかりでなく、従来石炭を基礎として生産されていたものを石油化学により低廉に生産出来ることが分かったからである。しかも石油化学の発展は旧来の石炭基盤の製品に対して、強力な競争相手としてこれを圧倒し、の

みならず、石油化学工業地帯は従来の石炭を基盤とした工場にかわって、日本の重化学工業の主力工業として完成した。一方その過程で自治体は、行政の独占資本従属を暴露したが、むしろ、国家が一切の自治体をなしくずし的に中央統制化しつつ、自治幻想をふりまきながら自治幻想を一時的に打ち破った労働者、住民（一九六四年、呼松住民は、ムシロ旗を立てて埋め立て地に抗議行動を起こした等）を強権的に弾圧し、国家秩序を末端にまで徹底しだした。それを積極的に支えているのは、市、府、県当局＝自治体であるし、自治体、独占企業とぴったりとゆ着している町内会のボス連中であることはっきりしている。もっというならば戦後の労働運動の立ち遅れと、社共既成政党の日和見的小市民的指導と裏切りのバックボーンがあればこそである。

現在、水島における反公害を軸とした闘争組織は、倉敷公害防止市民協議会、呼松公害排除期成会、松江公害対策委員会、公害とたたかう水島連絡会議等の組織がある。倉敷公害防止市民協議会は日本共産党の指導のもとに選挙対策的活動をやっており、その議会至上主義と日和見的活動は水島地区反戦の戦闘的活動によって日々明らかにされている。また呼松公害排除期成会、松江公害対策委員会は、いわゆる各部落のボス連中の手に掌握されているが、彼らと企業、自治体とのゆ着は、全住民が暗黙の内に知っている。そのような中で公害とたたかう水島連絡会議は唯一の闘う組織で、岡山大学の全共闘に水島反戦を中心として十一月一日に結成され、その立ち遅れを自己批判しつつも、十一月二九日、公害を粉砕する水島行動によって住民との連帯を勝ち取り、企業内プロレタリアートの獲得によって、自治幻想を突破し企業内反乱生産点での反乱を目的意識化している。

我々は、この調査を通じて独占企業と自治体との関係そしてそれらと既成組織との関係をち密につかみ、水島地域におけるギマン的反公害闘争を解体しようとしている諸君に調査結果を送りつつ、なにがしかの型で連帯しようと考えている。そして既成組織内での対立をますます激化させ、それに対するプロレタリアートを中心とする住民下部の下からの運動により、自らを闘争主体へと変革させ、明確に、既成組織を粉砕し、日本の反公害闘争の一大拠点を創出するそのいしずえになるであろう。

最後にマスコミあるいはジャーナリズムによってはやし立てられた公害問題は、現代社会の皮相的課題ではなくして、現代社会最底辺の構造を浮び上がらせ、日本帝国主義の矛盾を明確に表現しているものとして適確にとらえなければならない。そして我々は学園内において、公害問題を活発化させ地域住民プロレタリアートと連帯するその方向性をはやく作り出さねばならないだろう。すべての学友諸君、各地域で戦っている人達におしみない支援と連帯を!! 限りなき援助を!!

公害とたたかう水島連絡会議
倉敷市水島西栄町九の一三
内久保　隆　保

わたしの研究ノートから

（一）

昭和二十五年五月、奈良県御所市室（むろ）（当時北葛城郡秋津村室）にある室大墓（おおはか）（史跡宮山古墳）が何者かによって盗掘された。地元の警察署は犯人の捜査を開始したが、一方奈良県ではこの古墳が史跡指定地であり、しかも乱盗のために現地がひどく荒されているので、直ちに復旧作業を実施することになった。それに先きだって現本学名誉教授末永雅雄先生の指揮下で、橿原考古学研究所員秋山日出雄氏が現地担当者となり、現状確認の調査が行われた。当時わたしはまだ学部の学生であったが、この調査に参加する機会が与えられた。

調査は五月から開始されたが、何分墳丘全長二三八米という奈良盆地西南部における最大の前方後円墳であり、莫大な数量の埴輪片や竪穴式石室に豪壮な長持形石棺を納めた埋葬主体部の検出などがあって、現地作業に約三カ月を費し、またそれ以後出土遺物の整理や復原作業には約七年間の歳月を要した。

かくして室大墓の発掘調査の成果は多くの古墳研究に重要な資料を得ることができたが、なかでも竪穴式石室とそのなかに納められていた長持形石棺の構造・形式と多くの壮大な形象埴輪の出土は、日本古代文化の様相を知る貴重な遺物であった。

（二）

この古墳は大正十年三月三日、当時内務省より史跡に指定された。それは大和における屈指の大規模の古墳であることと、明治四十一年頃、前方部よ

り約十一面の漢式鏡と勾玉、管玉などが開墓によって出土したことが知られていること、さらに後円部の中央やや北寄に石棺若しくは石室天井石かと思われる加工した花崗岩の石材があったことによる。

ところが昭和二十五年の盗掘は、後円部中央やや南よりの地点で竪穴式石室とそのなかに長持形石棺を納めた施設のあることが判明した。したがって調査はこの石室を中心にすすめられた。

作業は石室を覆う土を排除し、天井石を調べ、さらにこの天井石を移動させて、石室及び石棺の構造を調査する順序で行われた。

先ず石室上及び石室を二重に長方形に取囲んだ埴輪列があった。現地調査・整理・復原の過程でこの埴輪列は楯・靫・短甲・草摺形埴輪などの武具や家形埴輪などを並べた形象埴輪であることが判明したが、なかでも靫形埴輪は高さ一四二・六糎、鰭部最大幅九九・五糎のわが国最大級の大きさでありしかもほとんど完全に遺り、従来全く知られなかったこの種の埴輪に新しい知見を得た。これらの埴輪は現在奈良県の考古博物館に保存陳列してある。

このような出土品もさることながら、埋葬主体部の構造極めて貴重な資料を提供した。

豪壮な長持形石棺の発掘

古代史の謎に挑むV

網干善教

全長五・五米、幅一・八八米の竪穴式石室は六枚（現存五枚）の巨大な板石で被蓋されていた。そして石室内には豪壮な長持形石棺があった。ことに石棺の蓋石には、八区画の格子状の彫刻があり、稀有の知見を得た。

長持形石棺は五世紀の頃すなわちわが国で最も大規模な古墳が造営された時代の、最大級の古墳に用いられた石棺である。厚い、大きな底石を置き、その上に側石を立て、蒲鉾形の蓋石で覆う組合せ式石棺の形式であるが、左右の側石、蓋石には縄掛突起が造り付けられる。現にこの種の石棺を実見できるものは極めて数がすくない。

（三）

丘尾を切断し、周濠をめぐらし、整然とした三段築成のこの巨大な古墳は一体誰を葬った奥津城であろうか。俗に武内宿弥の墓ともいい、孝安天皇陵ではなかろうかともいわれてきた。

古墳の被葬者を、ある特定の人物と結びつけることは極めて困難であり、軽卒な判定をなすべきではない。しかし山の如く、丘の如く築かれた室大墓の被葬者が誰であるにしても、少くなくとも五世紀の頃に実在した権力者の墓であることには間違いない。

古墳の所在は古代葛城の地である。かつて葛城国造や葛城県が置かれ、またその周辺はいわゆる葛城の鴨の故地でもある。この付近には鴨都波神社や高鴨神社もある。なお近くには鴨都波弥生式遺跡や双頭細線鋸歯文と銅鈴の出土した名柄遺跡も近くにある。

最近鳥越憲三郎氏の「神々と天皇の間」という新著によって「葛城王朝」なる仮説も提示された。

わたしにとってこの室大墓の発掘調査は学生の頃調査の一員と参加し、その後整理復原して昭和三十四年、秋山日出雄氏との共著『室大墓』（奈良県史蹟天然記念物調査報告第十八冊）を上梓した。勿論この報告書の刊行でもって室大墓の研究は終ったのではない。莫大な出土遺物の詳細な観察とそれを通じての研究はむしろ今後に後されれた課題である。

二十才代、興奮と感激のなかで、心血をそそいだこの発掘は、そしてそこで見た驚きは、今もなお鮮明に脳裡に生きている。わたしは今後の学問研究の中で、終始課題として追求していかねばならない。

（文学部助教授）

宇野経済学の歴史的意義と限界（上）

林　一（国際共産主義運動研究会）

宇野弘蔵が「何人にも論じ得る科学」の研究をはじめたのは、一方で、講座派の経済学者の二段階革命戦略、一国社会主義建設論に規制された日本資本主義の分析を行なってきたこと、ともう一つは、一九三〇年以降のケインズを筆頭とする近代経済学者の抬頭があり、それらを批判する内容として展開されたものということが先づ言える。

典型的には、スタリーンの「弁証法的唯物論と史的唯物論について」で「弁証法的唯物論は、マルクス・レーニン主義党の世界観である。この世界観は弁証法的唯物論と呼ばれる。なぜなら、それは自然現象弁証法的にとりあつかい、その自然現象の研究方法、これらの現象の認識方法が弁証法的であり、この世界観による自然現象の解釈、自然現象の理解、その理論が唯物論であるからである。

史的唯物論は、弁証法的唯物論の諸命題を社会生活の研究におし拡げたものであり、弁証法的唯物論の諸命題を社会生活の諸現象に、社会の研究に、社会史の研究に適用したものである。」

ここで、結論的に言えば、われわれが、マルクスに教えられるものは、その哲学的領域において、―（とりわけ、マルクス主義の形成は不断に論争の過程、しかも、それが、政治的実践の過程、より具体的には党派の争いの武器としての批判の中から形成されていることはすぐに気づくことなのだが）一つの公式としての弁証法的唯物論とか、史的唯物論を定式化してはいないことである。あるのは「導きの糸」としての弁証法、また、哲学における観念論と実在論、唯心論と唯物論を止揚した唯物論ぐらいである。

そして、弁証法的唯物論と史的唯物論との区別を、その分析の対象のちがいによって定義づけていること、すなわち、弁証法的唯物論は自然を対象にし、史的唯物論は社会を対象にした理論であるという具合にしていることは、スターリンが社会をも自然と同じものとして把握している事のあらわれである。というのは、自然現象の研究とその理解のための弁証法的唯物論の諸命題を社会生活の研究におしひろめたものが史的唯物論とされているからである。

たしかにマルクスは「経済的な社会構造の発展を一つの自然史的構造と解する私の立場は、他のどの立場にもまして、個人を、諸関係―すなわちいかに彼が主観的にそれを超越しようとも、社会的には、彼がそれらの被造物たるにとどまる関係―の責任者たらしめる事はできない。」（「資本論」序文）といっている。マルクスにとっては「人間も自然」なのである。だが、マルクスにあっては自然と社会との関係が次のように把握されている。「いわゆる世界史の全体は社会主義的人間にとっては、**人間的労働を介しての人間の産出行為**―人間のためのものとしての自然の生成以外のなにものでもない」（経哲手稿）かくて、マルクスは、社会の実体をなす人間的労働―それは社会的生産という外皮をまとっているが―を自然史的過程として分析したのであった。

ところが、スターリンのでたらめなそうした理論大系は、その集大成を、ソ連制「哲学教程」「経済学教課書」さらには「マルクス・レーニン主義の基礎」にみることができるが、それらの内容は、スターリンの指示のもとに、マルクス・エンゲルス・レーニンの諸著作の内容を解体し再編し、ひとつの聖典へまとめあげられたものとしてもほぼまちがいない。

それは、せんじつめれば、マルクス・レーニン主義は科学である、というスターリンの指示によって、その科学大系を史的唯物論大系として、その基礎を、唯物論弁証法、認識論等の羅列化された「弁証法的唯物論」哲学においたところの、人間社会を解明する科学として一個の形而上学的大系に集大成されているのである。

この史的唯物論大系は、具体的には、経済学を経済史に解消し、歴史を法則性の名のもとに恣意的に記述したところの現実の階級闘争の歴史とかけはなれた一個の教義なのである。

宇野弘蔵は、このようなスターリン式、科学としての「史的唯物論」体系に対し、経済学の内容から、これと対決し、宇野経済学体系を築きあげてきたの

であった。

宇野弘蔵は、このようなスターリン式科学としての「史的唯物論」大系に対し経済学の内容から、これと対決し宇野経済学大系を築きあげてきたのであった。その主要な論争点は、①理論と実践、②科学とイデオロギー、③史的唯物論（歴史と論理）、④資本論の方法、⑤帝国主義論の方法、⑥価値論、といったように、イデオロギーの領域から方法論の領域、そしてさらには、原理的内容に至るまでの全面的に亘る。

このような形態でくりひろげられた論争の対決点は、①価値法則と剰余価値法則、②資本主義社会の生成・発展・消滅、③生産力と生産関係の矛盾。

そしてこれらの対決点で、宇野経済学はスターリン主義を理論的に突破しえたのであるが、しかし、そのことによって、宇野経済学そのものが、真実を全面的に確立したわけではなかった。そのことの根本的理由は両者の論争が行なわれた地平そのものに存在する。

両者の対決点を見ればわかることであるが、スターリン主義は、史的唯物論を科学として措定しており、その結果、資本主義社会の生成・発展・消滅とか、生産力と生産関係の矛盾といった科学のみによっては、解明しえない諸課題をも、科学の課題として提起したのであった。宇野は、それに対して、出発点から、有利な立場にあった。宇野にしてみれば、そのようなものは、科学的に論証不能であることを証明すればよいのであり、そして本来論証しえないものを論証しようとするところからくる科学大系の矛盾、論理的破綻を突いてゆけばよいのであった。宇野はこのような立場に立つ限り、正しい問題提起をしてきたのであった。

「マルクス主義は科学的に論証され得るものを基礎にしているが、マルクス主義そのものが科学であるとは決していえない」（「資本論」と社会主義一四六）

「経済学が資本主義社会を―歴史社会として、それに特有な経済構造とその運動法則とを労働力の商品化という基本的矛盾によって解明するとき、社会主義の主張は科学的に根拠づけられることになる」（「経済学方法論」三七）

「原理論は勿論のこと、段階論でも現状分析でも革命の必然性が科学的に説けるとは思われない。科学的に明きらかにされた現状分析が革命的実践活動に利用されるのが、科学的社会主義としてのマルクス主義だと思っている」（「マルクス経済学の諸問題」一九九）

しかしながら、この論争過程のなかから、宇野自体が一つの立場を積極的に押し出し、スターリン主義とは丁度逆に、経済学を科学大系として、まとめあげようという意図を実現したとき、宇野経済学は、真実から遠ざかってゆかざるを得ないのである。

すなわち、この時点で、スターリン主義と宇野経済学とは、史的唯物論と経済学をそれぞれ対極にもったところの科学主義として、同じ地平に存在することになってしまうのである。

イデオロギーから科学へ、すなわちマルクスにおける「科学的な客観的立場」（「資本論」）と社会主義四八）の確立、また「マルクスが唯物史解を採るにいたったというのは、この科学的立場を社会現象に対しても採るということに外ならない」（同一一四頁）とか、「学問の成果を全く客観的真理の把握にある」（同一一九頁）から、「資本論」も「何人にも論じ得る科学的研究だとしてしまうのである。そして、おそらく、ここから、黒田寛一の苦闘がはじまる。

しかしながら、黒田は、宇野から「三段階論」「経済原則、経済法則」を採用しつつ、①場所的立場の不在、②プロレタリアの自覚として把握しえない「資本論の主体的理解主義」③認識方法論ぬきの方法論、④上向、下向の円環構造の直線化、等々の方法論次元の批判的批判が「宇野経済学方法論批判序説」の内容であり、その後も、少々問題は整理もされてきている。例えば、価値論において、①「物価された労働」と「生きた労働」との区別の問題、②「経済原則」の宇野式把握の問題、③「価値規程」における宇野学派エピゴーネンの混乱、など、しかしながら、このことの基底には、「賃労働者の自覚の大系としての資本論」の提起者たる梯哲学の自覚の論理によりかかりながら、唯物論を史的唯物論として体系化せるとする黒田のパラノイヤ的な意図があるだけである。ぼくたちは、唯物論（イデオロギー）と経済学（科学）との関係を、経済学による唯物論の基礎づけと、一方唯物論による経済学批判という思維の円環構造によって、真実の解明に至るという問題の解明の導きの糸をとりあえず提出する。

そして、宇野経済学に納得できない点を、ぼくたちは、先ず次のようなところに見出す。

「経済学は、むしろ資本主義の下では、例えば何故にかくの如き生産力の増進が異常な発展をなしたか、それは如何にして行なわれ、如何なる社会的影響を及ぼすことになるか、等々を解明することによって、いいかえれば商品経済に特有なる諸現象を解明することによって、商品経済の部分的に行なわれる諸社会にも共通する、したがってまた商品経済を止揚した社会主義社会にも共通に行なわれるものとせられる、経済生活の一般的規程をも明らかにするのである。」（経

済原論三頁）このような、宇野の古典経済学的回帰のファクターをのぞかするような立場に対して、マルクスは、経済学批判序言で、「わたしの研究が到達した結論は、法的諸関係および国家諸形態はそれ自身で理解されるものでもなければ、またいわゆる人間精神の一般的発展から理解されるものでもなく、むしろ物質的な生活諸関係、その諸関係の総体をヘーゲルは一八世紀のイギリス人やフランス人の先例にならって「ブルジョア社会」という名のもとに総括しているが、そういう諸関係にねざしている、ということ、しかもブルジョア社会の解剖は、これを経済学にもとめなければならない」といっている。これがマルクスの経済学に対する態度である。

宇野はつづいて、社会主義についても説いている。「経済学では、経済の原則は、法則と明確に区別されなければならないが、勿論、それは無関係のものとしてではなく、むしろ反対に、経済の原則が商品経済の下に、始めてその形態に特有なる法則としてあらわれるものとしてである。例えば、経済的に有利なる機械が採用されるという場合、機械自身は人間の労力をはぶくものとして自然科学的法則を技術的に利用したものであって、それを経済的に有利なるものとして採用するということは経済の原則である。ところが資本家的商品経済の社会では、この原則が、商品経済的にそういう経済的に有利なる機械を採用せざるをえないものとして、法則的に強制せられるのである。それは単に経済の原則として、人間の経済活動の基準によってその採用が決定されるというのではない。一般的には原則として行動の基準となるものが、法則として強制的に支配するものとなるのである。これが経済学を科学として可能ならしめると同時に、経済学はこれによって資本主義がそれに先きだつ諸社会に対して経済的に優位に立つ所以を明きらかにし、またこの原則を社会的に法則としてでなく、直接の生産者が主体となって計画的に実現しようという社会主義の主張の基礎を示すことにもなるのである。」（同四頁）

なんと、盲目的な法則支配を、自主的な行動原則に止揚還元することが社会主義となるではないか。人間の計画によっても結局同じことが実現されるのなら、現実のプロレタリアートの運動は如何にも無駄な仕事であり、経済の「原則」にあわないことである。「みえざる手」による支配の方が余程効果的である。なぜなら、完全な計画とは、結局は確率の問題としてしか実現できないのだから。

ここでは、プロレタリアートの現実の苦悩など全く彼岸化されるのである。

このような宇野経済学の問題のたて方は、資本主義的生産の暴露において、マルクスと異った結論に至る。宇野の最も独自といわれる価値論こそは、その典型である。

先ず、価値実体論の規定は論理を混乱させるとして退け、価値形態論から論じ、更に価値形態論をまた、資本主義社会に存在する価値形態を最も簡単な抽象された形態から、きらびやかな貨幣形態に発展するものとして論ずるのではなく、歴史的な交換過程の発展として論じたがために、貨幣の成立史は述べることはできても、貨幣のもつ物神的な性格を明きらかにすることは完全に失敗している。

マルクスは「資本論」第一巻第一編において、商品の物神的性格の秘密、即ち、人と人との関係が、物と物との関係としてあらわれざるを得ないことを、従って、資本主義経済の運動法則の解明が階級関係を科学的に解明する根拠となることを説明しているのであり、それは以後の彼の論理の大前提をなすのである。

価値実体論における労働の二重性の発見、彼が価値形態論における、その労働のうち、抽象的人間労働の側面のみが、資本主義社会の特有の性格を展開させるカギとなることを説明したのである。マルクスが商品からはじめたというのはその形態を問題にしたのでもなく、単に、富の原基形態だからなのでもなく、この商品論の展開の中にこそマルクスが経済学をやらねばならない立場を表明しているのである。宇野は全く反対に、価値＝同質性なる商品を依然として神秘の中から解放することは出来ないでいる。

第二にその結果、資本主義的生産は労働過程と価値増殖過程の統一であるとしてマルクスが現実の労働は、労働者個人にとっては合法的活動でありながら社会的関係においては全く内容の喪失した行為で、資本による処分権としてのみ価値となることのできる、すなわち死してのみ意味をもつ労働としてしか存在しえないことを暴露した内容を超歴史的な「労働生産過程」という新概念がこしらえあげ（生産過程とは生産物の側から見た場合で、抽象的人間と自然の観点から見た場合の労働過程と結合して新概念をつくられても、何のことかさっぱりわからないのだ）ることによって、見事に消し去りあたかも資本主義社会における労働がそれ自身で何らかの超歴史的内容をもつ即ち共産主義社会においても通用する内実をもったものとして抱えてしまっているのである。そして、このことから、マルクスにあっては、商品に対象化された労働の分析として設定された抽象的人間労働と具体的有用労働という労働の二重性と社会的規定性ぬきの生産物一般から説きおこすことによって超歴史的性格を与え、資本主義生産における労働を永遠的なものとして描き出し、これに基礎づ

けられて、いわゆる「経済原則の意識的適用」や共産主義論を導き出している。

第三には以上の結果、搾取の関係は全く分配の関係におきかえられる。即ち「必要労働—生活資料の生産に要する労働、剰余労働」というこれまた曖昧な概念を超歴史的に改定し、その必要労働の成果が、生産者に分配されるやり方が商品交換を媒介として行なわれ、剰余労働が資本家に与えられるということに資本主義生産の特徴をまとめあげられ、おまけに、その剰余労働は生産の新たなる拡大と補塡等々に当てられるとまで言われ、このこともまた、超歴史的な経済原則だと言われるに及んでは、資本主義をあまりに美化した論理に陥るのではないか。彼が資本主義を批判するのは、結局

労働が商品化されているということ、労働者の生活の再生産が、商品交換を媒介として行なわれることに対する小市民的潔癖性の反撥でしかない。それ以外は一切資本主義的生産を超歴史的なものとして抽きだすことに努力が費されている。

そして最後にこのような論理は、資本の蓄積過程（単純再生産及び拡大再生産）を述べる時、マルクスが資本論第一巻第七編第二一章及び第二二章でこの厖大な著書を通じてもっとも解明したかったこと、すなわち、労働力商品所有者としての独立した自由な労働者の姿は資本主義生産の本源的関係としてあらわれながら、その生産の反復のうちに全くの仮象に転化し、正真正銘の奴隷になるということ、「ローマの奴隷は鎖によって、その所有者につながれていたが、賃労働者は見えない糸によってその所有者につながれている。彼らの独立という仮象は個人的雇用主の絶えざる変動と法的擬制によって維持される」というこれこそがマルクスの思想をつらぬく〝タマシイ〟なのである。しかしながら、宇野はこの過程的再生産様式の中に、生産物の回転の中に埋没されてしまっている。

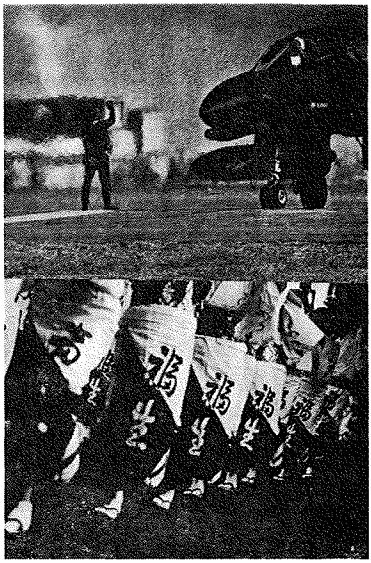
すなわち、マルクスの魂は一向に理解されず、彼の論理は労働力商品化という論理以前的告発（それはマルクスもいうように全くの仮象なのだが）をもって自己の頭の中で転回を遂げ、あとは生産物の側から一切見ていくという古典経済学の立場に立っているのである。

政治的潮流の中で、こうした宇野経済学に依拠している部分は、ほぼ、二つの傾向に分けることができる。一つは、生産物の分析の客観的な対象分析に変えるという、それをもって、何かを言う部分でありそれは労働力商品化の矛盾を「資本の生産できないものを…」という論理で展開し、その破壊を恐慌で描くという構想になってしまい、その限りで、生産力の発展ということを結局最終規準とするというところからスターリン主義との本質的譲和性をもたざるを得ない。二つ目は、労働力の商品化の一旬を押していくところからいきつく疎外革命論である

以上は、ほぼ、問題点の羅列的提出であり、しかも不充分である。内在的批判は次稿で展開する予定である。従って本稿は序論的な意味しか持ち得ない。問題は、①宇野経済学自体の歴史的な意味をもっと浮きぼりにすること、とりわけスターリン主義との関係、②更に、その政治的実践との関係の中でも果して来た宇野理論の功罪をあきらかにすること、③そして、④宇野の経済学に対する考え方、すなわち一方における近代経済学、他方におけるスターリン主義経済学との対決の中で形成された、しかしながら、逆に客観主義的偏向をたどらざるを得なかった宇野経済哲学、それ以上に宇野イズムというべきもの㊀宇野経済学の方法について㊁原理論の内容そのもの、として内在的批判が試みられる予定である。

そして、最後に、様々な形態をとってあらわれている生産力主義の根本の経済的基礎から、生産三要素、（労働力、労働対象、労働用具）を離れてはなりたたなく、無政府主義、疎外革命論なども、労働力に依拠する考えであり、そうした労働力を基本とする人間主義としての疎外革命論を、「労働と労働力の相互関係の問題の解明分析」を出発点とし、「労働をふまえた上で、これを労働力に還元すること」「質から量への転換を試みること」「労働過程一般から労働力へ無媒介に直結させないこと。」「賃労働→無償労働→精神労働と肉体労働の止揚（使用価値の止揚）を媒介として労働力に還元すること」すなわち、「これまでの生産力理論に対する批判の視点を、〈労働の構造的分析〉を出発点にしてなしとげる。」こと。この事をもって、宇野に対する批判的基軸は設定されると思う。これによってはじめて、ソ連批判、スターリニズム批判の基礎視座は得られ、本格的なスターリニズム批判も同時に開始されると思われる。

講演速記録



この原稿は一九七〇年十二月五日行なわれた講演の速記録である。原稿は佐藤氏が加筆・修正したものである。我々に志よく賛同して頂いたベルヴィル砦商学部実行委員会の諸氏には、誌上をかりて御礼を申し上げる。

唯物史観と経済学

佐藤金三郎
（大阪市立大学経済学部教授）

唯物史観と剰余価値論がエンゲルスにたってマルクスの二大発見と名づけられていることは周知のところですが、しかし、この両者の関係、いいかえれば唯物史観と剰余価値論を核心とするマルクスの経済学との関係は、これまでの議論によっても必ずしも明確にとらえられているということはできません。

そこで今日は、この問題を宇野弘蔵さんと平田清明さんという二人の御意見をとりあげながら検討してみたいと考えます。

二人の御意見の検討にはいる前に、唯物史観と経済学との関係についてのこれまでの通説を簡単にみておきますと、通説では唯場史観がマルクスの経済学研究にとっての導きの糸となったというマルクス自身の有名な言葉から、『資本論』はふつう社会の構造と発展にかんする一般的規定としての唯物史観を資本主義社会という特殊歴史的な社会に適用したものであり、したがって『資本論』は前提としての唯物史観によって基礎づけられているというふうに説明されています。

これに対して、宇野さんの場合には、ちようど通説とは逆です。唯物史観によって経済学が基礎づけられてはならな

い。逆に、資本主義社会を対象とする経済学によって、はじめて唯物史観が基礎づけられなければならない。これが宇野さんのこの問題にたいする根本的な考え方です。

この考え方の前提になっているのは科学はイデオロギーによって不純にされてはならない、むしろイデオロギーを論証してゆく過程が科学なのだという科学とイデオロギーとの関係についての宇野さんの独得の考え方です。宇野さんにとっては唯物史観もまた、それ自体としてみれば社会変革の主張を基礎づける社会主義的イデオロギーにすぎないのであって、それをただちに科学とみなすわけにはゆかない。したがって科学としての経済学の課題は、まさにこの社会主義的イデオロギーとしての唯物史観の規定を論証することのうちにあるのだということになります。つまり、宇野さんにとっては、唯物史観と経済学との関係は、前者が後者によってどう論証されるかという問題としてとらえられているといってよいと思います。

ところで、宇野さんはマルクスの『資本論』をもって、科学としての経済学を完成するための基礎を確立したものと考えられているわけですが、しかし、その『資本論』もかならずしも完全なものとはいえないと主張されます。たとえば『資本論』のに性格ついてですが、これについてはマルクス自身は『資本論』の序文の中でこの著作の究極の課題は近代社会の経済的の運動法則を明きらかにすることにあると述べています。しかし、宇野さんによると、マルクスのこの言葉には、明確に区別されるべき二つの側面が含まれているというのです。すなわち一つは資本主義社会の内部的仕組みを明らかにするという側面と、いま一つは、資本主義社会の生成・発展・消滅の過程を明きらかにするという側面です。宇野さんのいわゆる経済学研究における三段階論とは『資本論』に含まれているこれら二つの側面を峻別するところに成立するということができます。ここで三段階論というのは経済学の研究は、原理論・段階論・現状分析の三段階に分かれて行なわなければならないという主張のことです。まず、原理論は発達した資本主義社会を想定して、その内部的仕組み明をきらかにする。この原理論を基礎にして、次に段階論で資本主義の世界史的な発展段階についての基本的な規定が明らかにされる。そして最後に、経済学の窮極の目標をなす現状分析である。

このように宇野さんの場合、経済学の研究が三段階にわかれて行なわれなければならないとすれば、唯物史観を、経済学によって論証するという場合でも、当然にその論証は三段階に分かれて行なわれなければならないということになってきます。

もともと宇野さんにとっては、社会科学の対象をなす歴史過程は、一挙にそれを明きらかにすることはできないものです。歴史過程の理論的解明は段階的に行なわれなければならないというのが宇野さんの基本的立場です。

経済学による唯物史観の論証という問題にしても同じことです。この論証も経済学研究の三分野に応じて段階的に行なわれなければならない。

従って、出発点は、まず原理論による唯物史観の論証です。唯物史観を原理論で論証するとはどういうことか。それが問題です。

宇野さんの原理論は純粋な資本主義社会を前提とするものです。ここで純粋資本主義というのは資本家と労働者と地主という三つの階級だけからなり、それ以外の一切の中間階級を含まない社会のことです。

別のことばで言えば結局は同じことになるのですが、商品経済だけからなる社会、つまり商品経済の自己完結的体系ということができます。なぜ自己完結的体系であるかといえば、純粋資本主義は商品経済だけで自立的に運動できる社会だからです。宇野理論独得の用語でいえば「形態」によって「実体」が完全につかまれている社会だからです。

ここで言う「実体」は、あらゆる社会に共通な労働過程のことです。

どんな社会であろうとも労働過程なしには社会は一日も存続し発展することはできない。この労働過程を宇野さんは「実態」と名づけています。

これに対して「形態」というのは商品形態のことです。あるいは価値形態といってもよいでしょう。原理論の対象である純粋資本主義は、だからこのようなどんな社会でもそれなしには存続し発展することのできない労働過程という、実態が純粋に商品形態だけで完全に実現され、処理されている社会です。宇野さんが原理論で唯物史観が論証される、と言われるのはまさにこの点にかかっている。

ところで唯物史観の規定ですが、私はこれを一応つなの二つに、すなわち、社会の構造規定と社会の発展規定とに区別できるのではないかと思います。くわしい説明は略しますが、ここで社会の構造規定というのは、いわゆる土台と上部構造との関連についての規定のことです。ここで土台の決定的役割が明きらかにされます。これに対して社会の発展規定というのは、いわゆる生産力と生産関係との矛盾によって社会の歴史的発展転化の過程を明らかにする規定のことです。このように唯物史観の規定が二つに整理されるとすれば、宇野さんの原理論では唯物史観のこの二つの規定がどう論証されるのかが問題になります。まず社会の構

造規定は原理論でどう論証されるか。実をいうとこの問題は先ほど言ったように原理論の対象が純粋資本主義である、ということのうちにすでに答えは出ているのです。なぜなら純粋資本主義は、あらゆる社会に共通の実体をなす労働過程が純粋に商品形態だけで、いいかえると一切の上部構造の作用とはかかわりなしに、完全に処理される社会だからです。

経済過程が、基礎的決定的であるという唯物史観における社会の構造規定は、このような商品経済の自立的運動体としての純粋資本主義社会を対象とする原理論で、はじめて論証される。

では社会の発展規定は、原理論でどう論証されるのか。結論をさきまわりしていえば、これは宇野さんの場合、恐慌論で明らかになるのです、恐慌論が唯物史観における社会の歴史的発展転化の規定を論証するというわけです。前に述べたように、原理論の対象である純粋資本主義は、商品形態だけであらゆる社会に共通な労働過程が完全に処理される社会です。しかしこのことが可能となるためには条件がいる。労働力の商品化がまさにこの条件をなすものにほかなりません。宇野さんはこの労働力の商品化の中に資本主義の基本的矛盾をみています。本来、商品になり得ない労働力が商品になるという点に資本主義の根本的無理があるというわけです。資本主義社会はこのような労働力の商品化という無理を通さなければもともと成立し得ないものなのです。いいかえれば労働過程を商品形態によって処理することはできない。労働力の商品化はそのための前提条件をなすというわけです。

その意味では資本主義社会は、そもそも成立の時点ですでに根本的無理をかかえ込んでいるということができます。しかし大事なことは、資本主義社会はそれ自身のメカニズムの中にその前提をなす労働力の商品化という無理を通すことができる社会だということです。いいかえれば資本主義社会は、前提である労働力の商品化をみずからの結果として確保できる。すなわち前提が結果になり、結果が前提になる。これによってはじめて資本主義は一社会として存立し、発展することができるようになります。そしてこれを可能にするものがマルクスのいわゆる相対的過剰人口生産のメカニズムであり、また景気循環の過程であるということができます。

資本主義社会の発展は決してのっぺらぼうの一方的上昇過程ではありません。好況と不況とがたえず交代してしかもそれが恐慌によって周期的に切断されながら発展するという、いわゆる景気循環の過程が資本主義の現実の姿です。これはいわば資本主義社会が、労働力の商品化という無理を前提としてはじめて成立できるということにたいする代償といってよいでしょう。それはともかくとしてこの景気循環の過程は宇野さんによれば、資本主義社会における生産力と生産関係の矛盾と、それの現実的解決の過程を示すものです。ここから宇野さんは唯物史観における社会の発展規定は、原理論における恐慌論で論証される。つまり景気循環の過程は、唯物史観における生産力と生産関係の矛盾とそれの解決としての社会の発展転化の過程をいわば縮図的に示すものだと主張されるわけです。

以上簡単にみたように宇野さんは唯物史観の規定、すなわち社会の構造規定と発展規定はいずれも純粋資本主義を対象とする原理論において論証されると考えられるわけですが、しかし厳密にいえばこの論証には一定の限界があるといわなければなりません。なぜなら原理論で唯物史観の論証が可能であったのは、まさに原理論の対象が純粋資本主義、すなわち一切の上部構造の作用とはかかわりなしに、商品経済だけで自立的に運動できる社会だったからに他ならないのですが、しかしこのことが同時にまた原理論における唯物史観の論証の限界性をも示しているからです。これは一見矛盾のようにみえますが、決して矛盾ではない。実際、宇野さん自身が、このような原理論における唯物史観の論証の限界を承知しているのです。だからこそ、この限界が段階論および現状分析における論証で補足されなければならないということになるわけです。段階論および現状分析の対象は、原理論とは違って純粋資本主義ではありません。むしろ「不純」な資本主義です。土台にしても単に商品経済だけから成るわけではないし、また土台に対する上部構造の作用も問題になる。そのような現実の歴史的社会が段階論及び現状分析の対象です。私のいわゆる社会の構造規定にしても、また社会の発展規定にしても、唯物史観の規定は、この段階論と現状分析ではじめて積極的に論証できるといわれるゆえんです。つまり、経済学による唯物史観の論証はこのような二段構えの論証によって、すなわち、原理論におけるいわば消極的な論証と、段階論及び現状分析における積極的な論証とによっておこなわれるというわけです。

しかし結論的にいえば、私はこのような段階的アプローチでは唯物史観は経済学によって結局は論証しえないものであると思います。なぜなら宇野理論は本質的にはザインの世界とゾレンの世界とを峻別する二元論に他ならないからです。両者の間には永遠にこえることのできない溝が横たわっているからです。先にも述べたように、唯物史観の対象とする歴史過程は宇野さんにとって自由な意志をもった人間の織りなす一回的な過程であ

り、従って、法則的にはけっして解明しえないものなのです。だからこそこの歴史過程を理論的に把握するには段階的に接近するほかないという三段階論の考えが生まれてきたわけです。しかし歴史過程があらかじめ法則的には解明できないゾレンの世界として設定されている以上、段階的接近の方法をもってしても、結局は歴史過程は解明不可能なものとしてあらわれざるをえないのは当然の帰結といってよいでしょう。経済学による唯物史観の論証にしてもまったく同様です。三段階論をつうじての段階的論証をもってしても、宇野さんにとっては唯物史観は結局は経済学によって論証できないものなのです。両者の間は永遠に分離されたままです。二元論を本質とする宇野理論の前提からすれば、これも必然的な結論というべきです。

宇野さんについてはこの位にして次に平田清明さんの御意見の検討に移ることにします。

平田さんは御存じのように、ここ数年来、精力的に論文をお書きになっていますが、ここではその平田理論の全体についてではなく今日の課題である唯物史観と経済学という問題に限って、しかも宇野理論との対照という側面に力点を置いて検討してみたいと考えます。

結論を先廻りして言えば、宇野さんの場合には唯物史観と経済学のとらえ方は結局は**分離**主義であるといえるとすれば、平田さんの場合には**直結**主義であると思います。

『資本論』のとらえ方にしても宇野さんと平田さんはきわめて対照的です。平田さんは『資本論』を何よりも「歴史理論」としてとらえます。平田さんの書かれた論文の題名には歴史認識とか歴史理論とかいう言葉が何回もでてきます。これは平田さんの特徴をよく示していると思います。私は一昨年『大阪市大新聞』で平田さんと対談しました。そのとき平田さんはこういうことを言ったんです。「マルクス主義者はメカニズムということばが好きだ。たとえば、資本主義のメカニズム……というふうに。しかしマルクスの理論はメカニズムではなくて、むしろオルガニズムなのだ。機構論ではなくて有機体論だ」というんです。「市大新聞」に発表されたときには平田さんはそこのところを「メカニズムであると同時にオルガニズムだ」というふう訂正されました。正確にはそのとおりですね。しかし訂正前の「メカニズムではなくてオルガニズムだ」という始めの発言の方がまさに平田理論の特徴を示すものだと思います。

これに対して宇野理論、とくにその原理論の場合は、資本主義のメカニズム論です。つまり、メカニズム論対オルガニズム論というわけです。メカニズム論というと諸君たちがすぐ思い出すのはアダム・スミスでしょう。スミスが、市民社会の仕組みを時計の内部のメカニズムにたとえたという話はあまりにも有名です。いわゆる原子論的社会観。そこから科学としての経済学がはじめて生まれて来ました。すなわち、古典経済学。マルクス主義の源泉の一つがこのような古典経済学であり、したがってマルクス主義が市民社会のメカニズム分析という側面を継承していることは否定できません。もう一つの有機体論ですが、この考え方の源泉はドイツですね。マルクスに即していえば、とりわけヘーゲル。ヘーゲルは国家有機体説です。有機体ですから生命、したがって生成発展消滅というわけです。歴史主義というのは、何よりもドイツのものです。このヘーゲルもまたマルクス主義の有力な源泉の一つです。だからメカニズム論か有機体論かといっても、両方ともマルクスの中にあるわけです。思想史上いわれるようにマルクス主義は啓蒙主義と歴史主義との統一、いいかえるとメカニズム論とオルガニズム論の統一なんです。もちろん、平田さんはこういったことは百も承知のはずです。にもかかわらず平田さんの場合にはマルクス主義の特徴を何よりもオルガニズム論としてとらえているように私には思われます。平田理論の用語にしてもそうです。たとえば、唯物史観に、いわゆる経済的社会構成、あるいは社会経済構成体という用語ですが、平田さんはこれを経済的社会形成というふうに訳されます。フォルマチオーン formation をこれまでのように構成体ではなくて形成、つまり社会構成体ではなくて社会形成と訳すわけです。こういう訳し方一つをとってみても何よりもマルクス主義を有機体説としてあるいは歴史理論としてとらえるという平田さんの特徴がよく示されていると思います。

ところで平田理論の内容ですが、これを一言でいえば、マルクス主義の中に市民社会論を持ち込んだこと、より正確にいえばマルクス主義の中でこれまで見失われてきた市民社会論を復位させようという試みであるといえると思います。

しかし結論的にいえば平田さんの唯物史観解釈は社会の発展史を結局は市民社会の形成史に帰着させるものであると私は思います。市民社会の概念は平田理論のポイントなんです。平田さん自身、市民社会は社会の歴史認識のための「方法概念」であると強調されています。にもかかわらず、平田さんの言われる市民社会とは何かというと、かならずしもはっきりしない。それでひとまず平田さんを離れて、マルクス自身は市民社会を、どう把えていたかを調べて見ると、だいたい三つ程の意味があります。その一つ

は、資本家社会あるいは資本主義社会という意味。市民社会というのはドイツ語でビュルガリッヒエ・ゲゼルシャフト bürgerliche Gesellschaft です。ビュルガリッヒエというのはビュルガーの形容詞ですが、このビュルガーがブラルジョア―即わち資本家と記される場合ですね。第二の意味は唯物史観にいわゆる土台、即ち、物質的生活諸関係の総体としての社会経済的構造という意味です。第三の意味は、これが市民社会という言葉の本来の意味だと思いますが、分業と交換に基すく商品生産社会、即ち、アダム・スミスのいわゆる商業社会という意味であります。

以上にみた三つの意味はいずれも市民社会という同一の言葉で表わされていますが、それぞれ意味内容を異にしています。唯物史観認識に於る平田理論の特徴は、これら三つの市民社会概念をいわば同一視するところに成り立つといってよいかと思います。その点をもう少しくわしく述べてみますと、平田さんは人類史を共同体から近代市民社会への移行としてとらえる見方を世界史認識の基礎視座とよび、レーニンはじめこれまでのマルクス主義者はこの基礎視座を見失っていたといわれます。この点に関連していうと、マルクスに世界史発展の三段階論というのがあります。マルクスの一八五七～五八年の草稿『経済学批判要綱』に出てくるのですが、マルクスはそこで世界史の発展を三段階に分けて説明しています。簡単にいうと第一の段階が人格的依存関係。第二段階は全面的な物象的依存の上に築かれた人格的独立の世界、第三段階は自由な個性とその普遍的発展です。マルクスはこの三段階論を『要綱』では貨幣論の中で述べています。物象化の有無という観点からの世界史の三区分といってよいでしょう。この三段階を別のことばでいえば共同体→市民社会→共同体ですね。この第三段階の共同体がマルクスのいわゆる共産主義というわけです。注意を要するのは第一段階の共同体というのは資本主義以前のすべての社会諸形態を含んでいるということです。第二段階の市民社会は事実上資本主義社会のことをきしています。共同体から近代市民社会への移行という平田さんの基礎視座は、このマルクスの世界史発展の三段階論にもとずくものといってよいでしょう。これに対して普通唯物史観というと誰でもがすぐ思いうかべるのは原始共同体、奴隷制社会、封建社会、資本主義社会、社会主義社会という発展段階論ですね。そして、これらの諸社会は、たがいに生産手段の所有関係及至は階級関係によって区別される。いう迄もなく最初の原始共同体は無階級社会で次に奴隷制以降資本主義社会迄が階級社会、そして最後に社会主義社会が再び無階級社会というわけです。だから、簡単にいえば、さきの社会発展の諸段階は無階級社会→階級社会→無階級社会という三段階として表現することが出来ます。この三段階論を階級史観というならば、平田さんの基礎視座は、市民社会形成史観ないしは市民社会観であるといえると思います。平田さんによると、いままでの唯物史観解釈で誤っていたのは唯物史観を直ちに階級史観ととらえた点にある。そうではなくて階級史観の基礎には、社民社会史観があるのだ、むしろこの市民社会史観が歴史認識の基礎視座だということを強調されるわけです。では、平田さんは共同体から市民社会への移行をどう説明するのか。

さきに述べたように、ここでいう共同体は資本主義以前のすべての社会諸形態を含んでいるわけですが、平田さんはマルクスの『資本制生産に先行する諸形態』という論文の分析に基づいて共同体の三段階を区別されます。すなわちアジア的共同体、ローマ的共同体、それからゲルマン的共同体です。そして、これら共同体の三段階が階級史観でいうアジア的専制国家、奴隷制、農奴制の諸階級社会に対応し、それらの基礎をなしているというわけです。共同体の三段階はいずれも生産と交通とが結合しているという点で共通しており、この点で両者の分離を特徴とする市民社会と対立しています

が、しかしそれぞれの共同体も、所有の形態によって区別されます。共同体所有を前提とするアジア的共同体に対して、共同所有と私的所有という原理を異にする二つの所有形態が共存し対立しているのがローマ的共同体とゲルマン的共同体の特徴です。共同所有と私的所有が並存し対立しているといっても、もちろん中心は共同所有のほうにあります。しかし部分的にせよ私的所有が存在していたかぎりでは、ローマとゲルマンの両共同体ではそれなりに市民社会が成立していたということができます。いいかえればローマ社会と、ゲルマン社会は共同体と市民社会とが並存し対立している社会であった。平田さんはこのようなローマ・ゲルマンの社会で共同体と共存していた市民社会を旧市民社会と名づけます。

もちろん、これは資本主義社会と事実上等しい近代市民社会と区別してです。資本主義社会では共同体は全面的に崩壊し、市民社会に一元的に純化する。つまり、平田さんは、共同体から近代市民社会への移行という場合に、これを旧市民から近代市民社会への移行としてとらえているわけです。ローマ社会やゲルマン社会で共同体と並存し対立していた部分的な市民社会、すなわち旧市民社会が結局は共同体を解体させて近代市民の成立へと導く。だから平田さんの場合、共同体社会から近代市民社会への移行――と

いうことは資本主義以前の諸社会から資本主義社会への移行ということですが――の原動は市民社会にあるということにほかならざるを得ません。つまり歴史は市民社会の形成と発展の歴史に純化され一元化されるというわけです。正に市民社会形成史観といってよいでしょう。この場合平田さんのいう歴史の原動力としての市民社会とは何かが問題になるわけですが、一言でいえば、それは私が先ほど言った市民社会の第三の意味、すなわち分業と交換に基づく社会、商品生産社会という意味にほかなりません。平田さんの言葉でいえば、物を商品として生産する生産様式、すなわち市民的生産様式というわけです。だから、平田さんの市民社会形成史観というのは、この市民的生産様式、べつの言葉でいえば、商品生産社会に歴史の原動力を求めるものであるということができます。唯物史観の普通の説明では私が先に述べた市民社会の第二の意味、すなわち物資的生活諸関係の総体としての社会の経済的構造に歴史の原動力を求めるわけですが、平田さんの場合には、いわば市民社会の第二の意味と第三の意味とが事実上等置され、そのことによって唯物史観が市民社会史観に、いいかえば商品生産史観に事実上等置され還元されているといってよいかと思います。ここから平田理論は唯物史観における階級視点を無視するものだという批判が生まれてくるわけです。なぜなら市民社会という概念には、本来、同等の私的所有者同士が相互に交通しあう関係ですから、ここでは階級関係は直接には問題にならないからです。しかし平田理論の本来のねらいは階級史観と市民社会史観とを統一的にとらえようというところにあるということができます。この統一の試みが果して成功しているかどうか。平田理論でいえば、いわゆる「転変」の論理というのが、この試みにほかなりません。ここでは時間の関係で、私には最も重要と思われる、近代市民社会から資本主義社会への「転変」の論理だけをとりあげて検討したいと思います。

近代市民社会というのはさきほども述べたように、それ自体としては階級関係を含まない、同等関係が問題です。経済学的にいえば、価値法則の支配する社会商品、貨幣の社会、マルクスのいわゆる自由、平等、ベンタムの世界です。これに対して資本主義社会という場合には、何よりも、資本家対労働者という階級関係が問題になります。だから近代市民社会から資本主義社会への転変というのは同等関係から、階級関係への転変ということになります。この転変についての平田さんの説明が私にはどうしても理解できないのです。私、前に個人的に、この点について平田さんに聞いてみたことがあります。そのときの平田さんの説明によると、近代市民社会から資本主義社会への転変というのは、論理的には価値関係から資本関係への転変である。そしてこの論理的な転変が歴史的には、農奴制から資本主義社会への移行に対応しているというのです。たしかに平田さんは歴史的には近代市民社会という社会段階があったわけではない、それは、むしろ資本主義社会の表面的、公式的な形態であるというふうにも述べられています。つまり、同等の市民関係という近代市民社会は資本主義社会のタテマエの世界というわけです。これに対して、資本主義社会のホンネは不平等の資本家対労働者という階級関係。したがって近代市民社会と資本主義社会との関係は、同時に存在する資本主義社会の表面と深部の関係、タテマエとホンネの関係ということになります。この関係じたいは論理的関係であってなんら歴史的な前後関係ではありません。

ところが平田さんは、他方では、この関係は同時に歴史的な関係でもあるのだといわれる。先ほども言いましたようにこの論理的関係は同時に封建社会から資本主義社会への歴史的移行関係でもあるといわれるわけです。ここがまさに問題なのです。竹内芳郎さんは、雑誌『思想』の論文の中で、この点を検討されて平田理論の力点は、前者、すなわち近代市民社会と資本主義との関係を歴史的な移行関係としてではなくて、同時的に存在する資本主義社会のタテマエとホンネの論理的関係としてとらえる側面にあると解釈されています。しかし、私のみるところでは、この竹内解釈は正しくない。なぜなら最初に述べたように平田理論の特徴は何よりも、マルクス主義をオルガニズム論として歴史理論として見るという点にあるからです。だからいま問題にしている近代市民社会から資本主義への転変にしても、この転変は、単なる論理的な関係ではなくて、歴史的な移行関係としてとらえるというのが平田理論の正しい解釈であると私は考えます。問題は、この場合の平田さんの歴史的移行論ですが、その内容は価値関係から資本関係への歴史的移行論、つまり、単純商品生産から、資本主義生産への移行論であるといってよいと思います。日本の経済史学でいえば、大塚史学ですね。つまり封建社会の末期に成立した中産的な生産者層が価値法則の展開に媒介されて資本家と労働者に両極分解していく過程として資本主義の成立過程をとらえるわけです。平田さんの移行論はこの大塚史学の考え方をうけついでいます。

つまり封建社会から資本主義への歴史的移行が近代市民社会から資本主義への歴史的移行と等置され、従って結局は単純商品生産から資本主義への移行と同一視されているわけです。ご存知のように

マルクスの場合には、封建社会から資本主義への歴史的移行の過程は資本の原始的蓄積の過程と名づけられているわけですが、この原始的蓄積の過程が平田さんの場合には、いま述べたように単なる商品経済の拡大、発展の過程としてとらえられている。封建社会から資本主義への歴史的移行が階級関係の変更＝革命を含む断絶の過程としてではなくむしろ商品経済の漸次的拡大の過程、連続的過程としてとらえられる。この点マルクスが資本の原始的蓄積を述べるとき、国家のこの暴力を資本主義の成立にさいしての助産婦として強調しているのは、平田さんときわめて対照的です。

しかしながら平田さんの場合あくまでも封建社会から資本主義への移行の基調をなすものは、単なる商品経済の拡大、発展の過程であって、国家の暴力はそれに対する副次的なものにすぎない。これでは、しかし革命ぬきの平和的移行論になるのではないでしょうか。封建社会から資本主義への移行の問題が重要なのはこの問題が直接、資本主義から社会主義への移行の問題と関連しているからです。平田さんは、資本主義から社会主義への移行をこれまでのように両者の間に単に断絶しかみないのは一面的であって、それと同時に連続と継承の面をみなければいけないといわれます。私もまさにそのとおりだと思います。

しかし平田さんの場合には資本主義から社会主義への移行をとらえる場合に力点は、やはり連続のほうにかかっているように思います。これは封建社会から資本主義への移行を連続的にとらえる見方と正にウラハラをなしているということができます。この点に関連して、平田さんの場合、封建社会から資本主義への移行をこのように単なる商品経済の拡大、発展の連続的過程としてとらえるという立場から、資本主義の成立期における各国資本主義の類型の相違が結局は無視されてしまうという、いまひとつの問題点が出てきます。

この問題は現代における社会主義移行の問題をみていく場合にきわめて重大な問題であると私は考えています。平田さんは、マルクス主義は、西欧思想だと強調されます。唯物史観を結局は市民社会史観としてとらえる平田さんの立場からすれば、当然のことといってよいでしょう。市民社会が正常の発展を遂げたのは、地球上で西欧だけであった。そういう西欧市民社会の、いわば最良の子としてマルクス主義が生まれてきた。これは間違いありません。だが、社会主義への移行が現実に生じたのは、マルクスが期待していたように西欧ではなかったし、また現にそうでない。最初に社会主義革命をなしとげたのはロシアであったということもまた事実です。ロシア革命以後の今日までの発展にしてもそうです。

社会主義革命が生じたのは中国であり、東欧であり、またキューバであった。この事実と西欧市民社会の子としてのマルクス主義との関係をどうとらえるのか。まさにこれが問題です。御存じのように、一九一七年のロシアは西欧のような市民社会の十分な発展を見ないままに社会主義革命へと突入しました。そういうところで、いったいどういうことが起こるか。平田理論からすれば、後進国ロシアでの社会主義建設が種々のゆがみを生じた、たとえば官僚主義とか指導者人神とを生みだしたのは必然的であったということになります。これらのゆがみは、市民社会未発達のいわば代償であったというわけです。しかしこのような理解は果して正しいのだろうか。私はここには平田さんのようにマルクス主義を単に西欧市民社会の産物だといっただけでは決して片づかない重要な問題が含まれているように思います。

平田理論もけっしてこの問題を十分には解明していません。というよりむしろ、唯物史観を結局は市民社会史観に解消してしまう平田理論では、この問題は解決できないものと考えています。しかし、この問題の解明に全力をあげて取り組むところに、まさに今日のマルクス主義の運命がかかっているのではないかと私は考えてます。

編集後記

▼ 新しい世界史的状況の転形期、マルクス主義的思想・科学・方法形成を豊かにする視角が現実的に新たな展開を行なう。黒き闇の中からの胎動。ロシア革命に対して正統＝官僚からの評価は、歴史的個体的認識への生々しい感覚を欠如している。そこに《革命》は埋葬されている。松岡保（経助教授）の異端からのロシア革命の文献の紹介を通して読者諸氏は、ロシア革命の思想・方法の豊かさを発見することができるだろう。

▼ 更に「宇野理論」に対して「左翼急進主義の理論的支柱」とするエピゴネーンの徘徊は、その破産を衆知に露わにしていよう。かかる姿勢とは別途に「宇野理論」に取組んできた佐藤金三郎（大阪市大経教授）のベェルヴィル砦での講演内容（その後氏自身が補筆、修正した）を掲載した。併せて「宇野理論」の止揚への問題提起の論文も掲載した。《現在》の矛盾・止揚への道の切開への試みである。

▼ 綱干善教（文・助教授）の精力的、学究的な古代史の発掘は、単に未知なる世界のおもしろさではなく、その背景に私達の生活の発掘をみているからではないだろうか。綱干助教授はその多忙な研究活動のなか、本年度も墓を掘ることによって、生活を発掘するレポートの連載を予定していただいている。